

文 情 杼

評選生先音瓊波招士學文

女子文壇

二 等 蚊 や り 火

岩代 服部水仙子

「疊たゝいてこちらの人……」吃驚して舉げた顔を、ちらとご覧なされて其まゝごろりと横に、珍らしくはないけれども、あゝまたかとはばかり思はず胸迫るのを去り氣なく枕進めて、蚊遣りの火を掻きたてた。

「私しや格氣でなければ……一人てさした傘なれば……片袖濡れやう筈がない……」奥ではまた母様がお寐みなさらぬのにと、ハラ／＼しながらも私にはそれをお止め申す勇氣は無い。家を外にしてのお遊びも、皆妻たる私が至らぬ故と諦めて、千鳥足に夜半の門を叩く夫を迎へて、私は決して悪い顔一つしたことがなかつた。けれども夫は却てそれを喜ばぬ……やう見受けられる。今の唄……これとても決して偶然にお口にのぼつたのでは無いのだ。いつか慙う仰言つたことがある、愛すればこそ嫉妬といふものが生ずるのだと。夫は私の愛をひや／＼かなものと思つてゐらつしやるのだ。私だとして、私だとして女だもの、つめたき閨を淋しく一人守りあかした曉、熟柿臭い息吹きかけられて、それで氣持ちの宜いといふことがあらうか、たゞ私は、家庭の團樂に飽くことが出來ないで、外に於いて慰樂を求められるのを、夫を充分に楽しめしめることの出來ない妻の身として、假にも嫉妬がましいことが言はれようか、と常に謹んでゐるのに。成るべくならばと思ふ心から、如何したならば夫の意に叶ふかと、氣に氣を付けるが却てお氣に障るかして、鼻息を窺ふの、競々としてゐるのは嫌いだのと、時折のお小言、伴ふ母様のお不興は素より覺悟の前乍ら、つれ添ふ夫のつれなさに、人知れず袖濡らしては、結ばるゝ思に、おのづと閉ぢ籠り勝ちの、是また快活を好みますす夫のお氣には召さぬのであらう。何も彼も知り抜き乍ら、心引きたゝぬ我身の意久地なさ、辛らき口に泛ぶ笑みの、むしろ憎らしい。嫉妬！女の弱點と戒められて居る嫉妬！それも今の我身にくらべて見れば、穗に出る程の嫉妬を喜ぶ弱點を

第三卷第十二號

杼 情 文

—(七五)—

男の持つて居る以上、それ相當に必要なものではなからうか？それともこんな弱點を持つて居るのは、我夫ばかりなのであらうか？あゝ同窓廿八名の友、今は皆大方は人の妻である。會つて見たい。會つてお互にそれぞれの、不平、意見、夫に對する仕向けなどを、聞きもし語りもし、思ふさま泣いて見たい！さう昨日は我母校に同窓會があつた筈、それにしても出席した人達は、誰と誰であつたやら。あゝ世の荒磯の汐干の濱邊に、荒浪知らで遊んだ昔が懐かしい、戀しい。それと氣付いてさゝふる間もなく、いつか頬を傳はつた一雫は、ぽとりと灰に小さな穴を穿つた。積んでは崩し、頽しては積みして居た炭に、焼けた火箸は指先にあつく、我に反つて思より覺めた。

「貴夫！ラムネ召し上りますか？」團扇をもつて靜かに風を送りながら、にじり寄つて顔さし覗けば、いつの間にかやらずや／＼と夢に入つて居らつしやる。稍々くつろげた裕かな其胸に、私といふものはどれだけ席をとつてゐるのやら。蚊遣りの煙りは這うて亂れて青葉を渡る風サ／＼、鼾の聲は高うなつた。

(評) 綠雨の小説を読む心地す。

三等

○靈まつり

京都て

う

子

今日は要ちやんの新盆です。

要ちやんは私にはたつた一人の大事の／＼弟でしたがあゝ、こんななみに靈祭をせられるやうになつてしまひましたもの、何が悲しいとてこれほど悲しいことがありませうか。

彼の薔薇の頬、大きい眸、雷のやうな唇元、年は五つの可愛い盛りで、其又賢かつた事つたら、よく人が死ぬる子はみめよしと申しますが、ほんに是を思へばみめよくは生れぬものでございます。病み着いたのは一月後の夕方、其翌日は早……私が使の者に驚かされて、夢心地に學校から歸つた時は、あゝ早や……呼んで答へず叫んで聞えず、私は斯うと知つたらいかに試験中とは云へ學校へは行かなかつたものを。

ですが彼の他愛もなく眠つて居るやうな姿がどうして死んだ要ちやんと思へませう、現に其前日までは、腕白大將となつて騒いで居たではありませぬか、私はどうしても死んだ者——再びかへつて來ぬ者とは思へませんでしたが、小さい棺に入れられた時私は、要ちやんは死んでは居ない、屹度元の要ちやんにかへるから、せめて今晚だけでも家に置いてと泣いて母様に迫つたのです。あゝ夢になりとも斯うなるものならよかつたらうに。

要ちやんの枕元へは、日頃好んだおもちゃから、帽やサトベルまでいつぱいつまつた。そして夜に入つてか